
 文 献 紹 介

小林照夫著『スコットランド産業革命の展開』

 安彦正一
 (財)港湾労働経済研究所)

1. はじめに

産業革命に関する研究は現代の学界において強い関心の的であり、それを主題とした数多くの専門的研究が生み出されつつあることは改めて多言を要しないであろう。

角山教授が指摘するように「イギリス産業革命の研究においてアイルランド、並びにスコットランドが、産業革命に貢献した役割は誰れしも疑わないであろう」と、それにしても「アイルランド及びスコットランドの役割に関する研究は政治的国民的感情が絡んでイギリス産業革命研究の未開辺地域であり、同時に落し穴になっている。……この落し穴を埋めることによって本当の近代イギリス史研究の再検討が始まる」と(角山栄「イギリス産業革命」社会経済史学会編『社会経済史学の課題と展望』60頁)問題提起なされている点に注目すべきであろう。

それだけにスコットランド側からの論稿は極めて稀な状態となっているのが実情である。

このほど、小林照夫氏がスコットランド側からの欠陥を補う力作『スコットランド産業革命の展開』を上梓されたことは研究史の欠落を埋めるものとして最近の注目すべき成果である。周知のように氏は本学会員の一人でもあり、早くから欧州の港湾問題について関心をもちたれ研究発表を続けられてきた。今回、新たな論文を含めて6編を選んでまとめられたのが本書である。一読すれば明らかのようにいづれも氏のスコットランドの「産業革命」に対する独自の視点から丹念に検討されている。

さて、本書の特徴がどこにあるかは本書の構成、つまり収録された6編の論文目次(小見出しは省略)によって一応窺い知ることができる。以下篇別構成、内容について若干の紹介をしてみたい。

2. 本書の内容と構成

序 説 産業革命研究の現状と課題

第一章 近代スコットランドを考えるにあたって

第二章 産業社会の興隆

第三章 運河建設とエディンバラ経済圏の拡大

第四章 エディンバラ経済圏の拡大を願う市民

第五章 鉄道時代の到来

第六章 スコットランド経済圏の形成と幹線鉄道

あとがき、よりなる。

目次に見るように本書は全体を六章に分け20節からなっているが、全体を大きく分けると前半は港湾問題、後半は鉄道問題の二つに論稿が分類されると思う。

ひとまず、序論において、著者はイギリス産業革命研究の近年迄の研究動向を網羅的に概観された上で、最近の成果を踏まえつつ、本書では「多くの「産業革命」に関する研究業績がイングランド側から考察されてきた」と言う著者の認識のもとに、本書の課題は「スコットランド側から英国産業革命研究の考察」をすることに重点がおかれている。各論文は専らこの欠落を補うべく執筆されてきたものでありそれらは「スコットランドのコミュニケーション問題」を対象にした、と言う。著者は更に「スコットランドの産業革命の研究は、とりわけ、エディンバラ経済圏の整備がスコットランドの産業革命の歴史でもある」とした上で、本書の狙いも「産業革命期におけるエディンバラ経済圏の形成史を描写する」ことに焦点を合わせている。

以上のように、研究視角、対象の範囲を確定した上で、著者の明快な説明がなされていく。

とりあえず、第一章「スコットランドを考えるにあたって」では、近代英国の歴史を見るとき、そこには調和と不調和の矛盾に悩む姿が本来の英国であり、それは高度資本主義社会の中に被いかくされており、民族感情の縫いは把握できていないと言う。それだけに英国の国民経済の形成と発展史を見る時、複合的形成史にこれまで以上に目を向ける必要があるとする。そこには民族間の対立（イングランド・スコットランド・ウェルズ、北アイルランドの人々）があり、そのピークは1960年代半ばに始まる北海油田の開発にあり。自治権復権の気運を醸成したとして著者はスコットランドに於ける自治権復権問題に多くの頁を当て、それに関連して、国民投票の結果などを詳述する。その結果自治権復権問題は現代のスコットランド分析の視角を提供してくれたとしている。

第二章は産業革命時代のエディンバラの都市発達を生き生きと描いている。

18世紀の終りのエディンバラは、英国でも特筆すべき大都市であった、産業社会が

本格的に展開した19世紀にはニュー・タウン建設が始まるなど、都市構造変化及び経済構造の解明などエディンバラの都市分析を通じてリース港との関係などを明らかにしていく。

第三章及び第四章は、「港湾問題」を専門とする著者の分野であろう。ヨーロッパの内陸水路の発達にとって運河交通が重要な地位をしめていたことはいうまでもない。今日のイギリス運河網は殆んどが産業革命期に完成したのであり運河網による内陸交通の発達を抜きにしては産業革命を論じることはいふべきでない。それは特に石炭の偏在を調整し、奥地の炭田の開発を促進した。いうなれば、石炭の歴史との関係を問題としないといけない。イングランドの運河と同様にスコットランドの運河も石炭の大量輸送という要請にもとづくものであった。著者は、代表的運河であるフォース・クライド運河を取り上げ多くの統計的分析を試みておられる。

ここに示されている多くの表及び数量的指摘は、それ自体資料的価値を有するものであるといえよう。むしろ問題はスコットランドの運河がいかなる意味においてエディンバラの経済圏の担い手になったのであろうかということであろう。例えば「フォースクライド運河とモンクランド運河の合流」にこそその意味が見出されるとしている。

著者はこの点に関して「スコットランドの運河計画の中でもこれほど重要な経済的効果を発揮したものは他にはなかった」として高く評価している。

本章二、三節はユニオン運河の建設経緯を述べられ、調査報告書を中心にほぼ余すところなくまとめられている。そしてリースとの結びつきがなかったのでエディンバラ経済には運河としての経済効果は少なかったとする。

四節「港湾産業都市グレンジマウス」では港を中心とした港湾産業都市としてのグレンジマウス都市形成史ならびに港湾の形成問題について述べている。その過程の中でグレンジマウスは、むしろ港湾機能の拡大といったことより、都市として経済的立地条件が、グレンジマウスを産業港湾都市として変貌させたとしている。

第四章「エディンバラ経済圏の拡大を願う市民では」、エディンバラにおけるリース港の位置づけを述べている。

そこにおいてリース港の拡張・港湾機能の改善のための港湾改修工事などをまとめている。

その中で改修工事にもなう商人と市民の対応という視角からリース港の変容を述べていることは興味ぶかい。

第五章以下は前半の問題に関連づけながらも鉄道問題を中心に論稿を進めている。

いうまでもなく、イギリスにおいて1830年代から40年代におこった鉄道ブームが19世紀前半のイギリス経済に与えた影響は大きい。

クラッパムの大著『近代イギリス経済史』の内1820年代から50年を扱った第1巻に

「初期鉄道時代」のサブタイトルが付されていることによってもうかがえる。本書第5章「鉄道時代の到来」では、エディンバラ経済圏における個別鉄道会社の建設過程を追跡している。

以下2節、3節においては開設された鉄道エディンバラ・ダルキース鉄道を事例としながらリース港との関連、鉄道開設に伴うリース商人との利害関係を論及している。

4節はリース港における臨港鉄道の建設がエディンバラ経済に果たした役割を詳しく展開する。

第六章は鉄道輸送に伴う経済的効果をスコットランドの幹線鉄道と言われるエディンバラ・グラスゴウ鉄道会社にみる。そこにおいて鉄道会社が運河会社及び中小鉄道会社を吸収合併していく過程と鉄道網の整備について論述されている。

三節はエディンバラノーザー鉄道、四節はノース・ブリティッシュ鉄道とカレドニアン鉄道を事例としつつ鉄道における地域経済の発展について検討される。最後にかような建設史を通じてロンドンを中心にして発達した鉄道と、エディンバラを中心にした鉄道の結合がイングランドとスコットランドを経済的に統合したとするが、しかるに今日でも自治権復権問題が提起されることはむしろ連合王国の歴史的現実がむしろ解決されたことではなく残されていたといえる、と述べている。

3. 終りに

以上本書について簡単に内容紹介をしたが浅学な評者による紹介は多くの誤ちを含んでいると思われるが、本書を一読してスコットランドの経済史研究に大きな手がかりを与えてくれるものとして評価できる。また、本書の問題はすこぶる多岐にわたっており経済史、港湾史、交通史、商業史の領域にまたがる多彩な内容をもった書であるといえる。

次に気づいた点を述べると、本書は、事実の精密な実証的考察を加えた点にある。とくに、節末に付けられた豊富な注釈は著者の苦心の跡がうかがえる。とはいえ、スコットランド産業革命研究のより深い研究者のために本書末に一括して資料を上梓して欲しかった。

更に加えるならば、本書の前後に連合王国の地図をそう入されたら一段と本書の利用に際して便利だと思われる。

いずれにせよ、評者は本書から実に数多くのことを学ぶことができた。

スコットランド産業革命の研究はこれからの課題でもある。本書はその意味でもその第一歩たるものと思う。筆者のこれからの活躍を期待したい。

(発行所 八千代出版刊 定価2,500円)